



お名もととしじ
岡本敏治さん
「ひらかたパーク」園長

遊園地の可能性を信じて 21世紀にふさわしい アミューズメントパークを

老舗遊園地「ひらかたパーク」(愛称「ひらパーク」)の人氣が低迷する中、園長に就任。奇抜なCMに加え、イルミネーションやハロウィンなど季節ごとに多彩なイベントを開催して、入園者数は大きく回復。現在もさらに魅力のある施設を目指して、新企画を展開中です。

攻めの姿勢で人氣回復

「ひらパーク」といえば、アイドルグループV6の岡田准一さんを「園長」に起用したCMが話題です。

岡本 すでにネームバリューのある方なので、出演していただくだけでも宣伝効果はあるのですが、アイドル概念に臆せず果はあろうか、ふざけたことを大まじめにやる「ひらパーク」らしさを前面に押し出した企画に毎回挑戦しています。関係者の方々にも徐々に理解いただけたようになってきました(笑)。これからも「岡田園長」に頑張っていたらいい、さらにインパクトのある楽しいCMを作りたい。ちなみに対外的には、私は「園長代理」ということになっていきます(笑)。

——園長就任以来、業績好調です。要因は何ですか。

岡本 14年度、15年度と年間入園者数が100万人を突破し、今年度はさらに伸びるのではと期待しています。CM効果に加え、事業方針を常にチャレンジする積極姿勢に転換したことが大きい。2010年頃から入園者数が100万人を下回る厳しい状態が続き、しばらく縮小均衡の傾向が強くなっていく時期がありました。遊園地の一般的な事業手法というのは、何年かごとに新しいアトラクションを導入して、そのニューズ性で集客を図るといいます。

のですが、例えば小規模のジェットコースターでも導入に何十億もかかる。それでアトラクションの維持管理はするが、収益拡大のための更新はしない。採算を重視すれば仕方のない方策ですが、それでは遊園地としての魅力は下がっていく。悪循環です。そこで園長に就任した年から攻めに出ようという方向転換しました。とはいえアトラクションをバンバン新しくするわけにもいかないので、企画勝負です。しかし、しばらくの間、効率化や採算性を厳しく問われ続けた社員たちは、失敗は許されないと萎縮してしまつて積極的に提案してこない。「ポツ」にされるだけ「言っても無駄」という意識が強かつたですね。

——どう意識改革されたのでしょうか。
岡本 少し前の年間入園者数120万人を維持し賑わっていた時代とコンテンツは大きく変わっていないし、スタッフは遊園地の企画運営ノウハウを持っている。潜在能力はまだ十分あるはずだと、私自身は信じていました。それに、長年京阪電鉄の広告塔的役割を果たしてきた施設なのに、社内から「いつまで続けるんだ」といった声が聞こえてくるのも悔しかつた。このまま縮小していくだけなら「ひらパーク」の存在意義がない、お客様の笑顔のために失敗を恐れずチャレンジしようと思つて続けた結果、徐々に社員の意識も変わっていく、秋のハロウィンや、冬の園内をイ

ルミネーションで飾る「光の遊園地」等の人氣企画が生まれました。冬に投資するなんてと否定的な意見もありましたが、「とにかくやってみよう。やらないで諦める方がマイナスだし、一つ一つ彼らの出すアイデアを実現。もちろん、うまくいかなかった企画もありましたが、それも含めてお客様からは何らかの反応があつたし、やれば成果として現れるんだという体験を積んでいくことで、社員全体が攻めの姿勢になってくれたのかなと思います。

「ひらパーク」でしか味わえない 楽しさがある

——娯楽が多様化し、遊園地にとっては厳しい時代だと思いますが。

岡本 USJがオープンした時は大きく流れが変わるのではないかと危惧したのですが、施設内容も対象顧客もまったく違つて行かないですね。何か月も前から予定を立てて行くようなテーマパークに対して、「ひらパーク」はこの週末に時間ができたからと気軽にお越しただく、そういう近い距離感にある存在です。一方、スマートフォンやネットゲームの登場、商業施設の大型複合化が進み、エンターテインメントが多様化するなか、遊園地は「役割を終えた施設」という見方があるのも事実。でも、家

族や友達同士で楽しく過ごされる姿を園内で日々見かける私たちは、そんな施設が要らなくなるはずがない、パークではなくリアルに体験し、様々な思い出を共有する遊びの空間として、遊園地にこそ社会的な存在意義があると確信しています。

——熱い「ひらパーク」愛を感じます。

岡本 遊園地運営というのは、お客様の期待を超えるものをご提供できれば喜んでいただけ、喜んでいただければ収益が上がるという至極単純な事業。そもそも鉄道会社に入社したのは、人の生活を支え、人に喜ばれる公共交通機関の仕事に魅力を感じたから。遊園地というのは、ある意味その「人に喜んでいただく」という部分に特化したような事業で、やつていて面白いんです。

新しい遊園地の形を求めて

——今後の展開をお聞かせください。

岡本 遊園地という、まだ昭和のイメージがあるでしょ。皆さんが思い浮かべるのは、乗り物があつてショーをやつていてという、ちよつと懐かしくてレトロなもの。魅力的な娯楽施設として生き残つていくには、そういう既存のカテゴリーから脱して、人の想像を超えるようなエンターテインメント性を持つ、新しい形の遊園地にしていく必要があると考えてい

ます。それが私の目標でもあるし、そこでたくさん笑顔が見ることができたらこれ以上嬉しいことはない。付け加えるなら、菊人形展をいくつか別の形で復活させたいですね。2度目に「ひらパーク」の担当になつた際、菊人形展の閉幕に立ち会い、100年近く続いた事業の重み、文化的な価値を再認識しました。単なる催物ではなく、これは日本の芸術の一つだ。今の時代のエンターテインメントと融合した新しい興業の形に創り替えて、もう一度お披露目できたらと思っています。

——大学生にメッセージをお願いします。

岡本 最近の若い方は自分をきれいに見せるのが上手で、器用だなと感じます。でも壁にぶつかったとき、器用なだけでは乗り越えられない。心の底からこうしたい、こうありたいという信念がないと、自分の気持ちに誠実に向き合ひ、本当に成し遂げたいことを、卒業までに見つけてもらいたい。それと学生時代は、勉強でもスポーツでも恋愛でも何でもいいので思いっきり没入してたくさん経験の積み、精神的なタフさを身に付けて欲しい。私は4年間、野球に打ち込む中で、努力したら報われるということ、逆にどんなに努力したつてうまくいかないこと、その両方を学んだ。その経験が、失敗することも多々ある興業商売の世界で役立つと思っています。(2016年8月2日)



かわおともこ
川尾朋子 さん
書家

書を世界の美術に

書を通じて 人や社会に働きかける

新島八重の生涯を描いたNHKの大河ドラマ「八重の桜」。6月のオープニング映像をご記憶の方もおられるでしょう。墨のしぶきと筆跡が、舞い散る桜に重なっていく非常に印象的な映像でした。あの作品を制作したのが書家の川尾さん。病氣と戦った辛い時代が書家として生きる道を選ばせ、今なお志を持ち続けて活躍の場を拡大中です。

趣味ではなく
生きる支えだった書道

書道に打ち込まれるようになった経緯をお聞かせください。

川尾 6歳から私塾に通って書道を始めました。男勝りなおてんばな子どもだったので、書を習わせたら少しは精神統一ができるかなと母が考えたようですが。時間の集中で作品が仕上がるところが性に合ったのでしょうか。毎回得られる達成感や、筆と紙が触れ合う感覚も好きになりました。その後小学校6年生からひどいアトピーになり、気分が病んでいて、いつしか書道が生きる支えになっていったんです。

同志社女子大学に進学された動機は何だったのですか。

川尾 治療のため京都の病院に入院した時期があり、京都という街の魅力に惹かれたからです。当時は書道では食べていくことは考えておらず、好きなフアッションなどを仕事にしようと思つて生活科学部を選びました。

大学卒業時には就職活動をされて、内定も出たと聞きます。書の道を選ばれたのはなぜですか。

川尾 会社には申し訳ないのですが、内定をいただいても全然嬉しくなかったんです。それにインターンシップで働い

たときに、会社の仕事は100%の力で取り組むべきことだと感じた。でも書道是我的アイデンティティーですから、全ての力を会社に注ぐわけにはいきません。就職直前の3月、研修期間が終了した瞬間、就職はやめようと思つきました。以後は30歳まで9時から5時の仕事に就き、夜は書に打ち込みました。2004年から著名な書家、祥洲氏に師事したのも、将来を見据えて古典より深く学び、もつと自分の書に幅を持たせたいと考えたから。自分のアトピーを持ったのは2011年。今はたくさんの方々のお蔭で、書ひと筋で生きています。

書の魅力を教えてください。

川尾 今を生きていることを実感できる場所でしょうか。後戻りはできないし、ひと文字はひと筆で書きあげる。一画ずつ墨をつけて書くとき脈が一貫しませんから。二度書きもできません。人生と似ていますね。道具をすべて大地の恵みで作っている点にも醍醐味を感じます。

書道を通して
福祉活動から世界進出まで
幅広く生きる

近年、「呼応」というシリーズに取り組まれていますね。

川尾 書道では古典を模写する「臨書」を

学びます。書道界のスーパースター、王羲之や空海などの作品を模写するものです。でも臨書を積み重ねるうち、いにしへの書家の筆が空中でどう動いたのかが分からないと、模写は深められないと思ひに至りました。2次元の作品を3次元で捉え、空中における筆の動きを可視化したものが「呼応」です。見えないものを想像するのがテーマです。

大河ドラマ「八重の桜」でのオープニングにも作品が使われましたね。

川尾 アートディレクターの菱川勢一さんが、私の作品をご覧になって連絡をくださったのがきっかけでした。あの作品も「呼応シリーズ」の一つです。

書を通じて、どんなことを表現したいとお考えですか。

川尾 見てくださった方が何かに気付いたり、非日常の世界を感じてくださったたりすればいいですね。もちろん、自身の作品コンセプトを読み取ってくださると嬉しいですね。

パソコンの普及によって、手で文字を書く機会が減りました。書家としてどのような思いを抱いておられますか。

川尾 約3500年の書の歴史は今、大きな過渡期を迎えていると思います。手で書く文字は、まさに「自分」なんです。自分を文字に注入する機会が減っている。そこで、自分自身が文字の中に入るシリ

ーズにも取り組んでいるところです。書きたての文字の中に私が入り、セルフタイマーで写真を撮る。書とデジタル写真との融合、書と先端技術との融合です。また「二十一世紀連綿」シリーズでは、日本語にすつかり定着した横書きについての問題を提示しています。「連綿」とは、書道で2文字以上を続けて書くこと。本来、書道は縦書きを前提にしたものです。しかし現代の日本語は、パソコンに代表される横書きが主流です。連綿体で横書きをすると、文字はどうなるのか。これは実験でもあるし、横書き文化への密やかな問題提起でもあるのです。

各地で地道なワークショップも行っておられますね。

川尾 「今」を生きる私にできることを探しているところです。奈良市にある福祉施設「たんぼの家」で2カ月に1回開催しているワークショップもそうです。自分で筆を作るところから始まり、世界に一本しかない筆で自由に書いていただきます。障がいのある方でも、短時間の集中は可能です。そこで達成感を得ていただければいいなと考えています。他にも小学生と「七夕飾」を作るワークショップを東本願寺で開いたり、提灯に筆で書くワークショップを京都府立医科大学附属病院で行ったり。長期入院中の子どものために好きな文字を一つ書いてもらうもの

で、4、5年続けています。これらの福祉・医療に関わる活動は、できる範囲で続けていきたいと思っています。パッケージ化して、他の場所でもこのような機会を増やしていただけたらいいですね。

セラピーのようなワークショップです。その志の原点はどこにあるのですか。

川尾 やはり私がアトピーで苦しんでいた時、書に支えられたからだと思います。私にしかできない何かを、今後も探していきます。

お話を伺っていて、非常に独創的な活動をしておられると感じました。活動の先に目指すものは何でしょうか。

川尾 私がさまざまなライブパフォーマンスや作品制作に取り組んでいるのは、書の魅力を世界へ伝えたいからです。一度きりの、ワンレイヤーの世界をもつと伝えたいのです。将来的には現代美術として世界的に認められるのが願いです。そのために重層的なコンセプトをもつて作品を生み出していきたい、ゆくゆくはニューヨークで個展を開くのも一つの目標です。あそこは多様な文化を認めてきた街ですから、チャンスがあるのではと期待しています。

(2016年7月4日・京都府のアトリエにて)